

令和 6 年 6 月 25 日現在

機関番号：13801

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2020～2023

課題番号：20K00678

研究課題名（和文）省略現象における日英語対照とその獲得研究

研究課題名（英文）Contrastive Study of Ellipsis Phenomenon in Japanese and English and its Acquisition

研究代表者

小町 将之（Komachi, Masayuki）

静岡大学・人文社会科学部・教授

研究者番号：70467364

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000円

研究成果の概要（和文）：言語表現において、音声的に表出しない要素が担うはずの意味内容を伝達するための言語機能のメカニズムについて、統語論、談話文法、第二言語習得、それぞれの観点から研究を行った。統語的なメカニズムでは、コピー形成のプロセスが統語構造を解釈するために必要な条件を検討した。談話の観点からは、話し手の感情表出を生み出す基盤となる要因として、動詞のアスペクト的特徴を検討した。第二言語習得の観点では、他動詞の目的語欠如の誤りについて、学習者が手がかりとする要因を検討した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

これまでの言語研究において、言語の省略現象は、様々な観点からそれぞれの文脈で深く探究されてきたが、その成果が相互に参照されることは稀で、我々はこの言語現象を総合的に理解できているとは言い難い状況にあった。本研究では、異なる分野を専門とする3人の研究者がそれぞれ、複数の観点から掘り下げた知見を相互参照しながら全体像を探るアプローチを取ったが、その結果、動詞の目的語の省略を許容する要因について、一定の見通しを付けることができた。このことは、異なる分野間の協働を推進するために、分野間の垣根を下げる一定の効果があったものと思われる。

研究成果の概要（英文）：This study examined the mechanisms of linguistic functions for conveying semantic content, which is supposed to be carried by non-phonetically represented elements in linguistic expressions, from the viewpoints of syntax, discourse grammar, and second language acquisition, respectively. In terms of syntax, we examined the conditions necessary for the process of Copy Formation to interpret syntactic structures. From the discourse perspective, the aspectual characteristics of verbs were examined as a factor underlying the production of the speaker's emotional expression. From the perspective of second language acquisition, we examined the factors that cue learners about errors of object absence in transitive verbs.

研究分野：統語論

キーワード：極小主義 第二言語習得 動詞のアスペクト 感情表出 コピー形成

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

言語表現は、音声的に表出してはじめてその意味内容を伝達するが、ある一定の言語的条件のもとで、表出しない要素が担うはずの意味内容を伝達することができる。たとえば、以下のような人物 A と B のやり取りにおいて、B のセリフは明らかに命題的内容を担っている。

- A: “What did you buy?”
B: “Two books.” (= “I bought two books.”)

ここで関与する省略現象をめぐっては、(A) 省略された情報を復元するのに十分な情報は、言語的手がかりとして談話上にどの程度残される必要があるか、そして、(B) 省略の対象として認められるのは、どのような要素かについて、話者の言語知識において、談話文法と文文法の両側面から明らかにする必要がある。また、どのような要素が省略可能かについては、個別言語ごとに相違が見られることもよく知られており、このことは言語獲得(母語および第二言語)の観点において重要な問題を提起する。獲得の対象言語は、当該言語の学習者に様々な言語経験を提供することで、当該言語の特性を伝えているはずである。しかし、(C) 表出されない省略表現では、その省略可能性等に関する個別言語に帰すべき要因を、学習者はどのように知なのかについて、本質的な疑問が残る。すなわち、(C-1) 獲得の引き金になる要因はどのようなものか、そして、(C-2) その要因は第二言語獲得においても学習者にアクセス可能か、という問題である。

省略構文に関する文法研究は非常に多く多岐にわたっているが、獲得の視点を取り入れた言語間の相違に関する研究はまだそれほど多くとは言えない。パラメータの具体的な提案も限られているが、項の省略に関する具体的な提案として、自由語順との連動説(Oku 1998 など)および一致の欠如との連動説(Saito 2007)があり、それらをめぐって母語獲得研究が展開している(Sugisaki 2013, Otaki and Yusa 2012)。いずれも自由語順との連動説を支持するものであり、議論がそれほど煮詰まっているわけではない。第二言語獲得研究においては、省略可能性の言語間変異について、パラメータの観点から検討しているものはほとんど見られず、先駆的な事例として、Kizu and Yamada (2016, Proceedings of PacSLRF 2016)による日本語を学習中の異なる母語話者間を比較した項省略に関する研究などが挙げられるが、まだそれほど活発に行われてはいない。

2. 研究の目的

本研究の目的は、以下のそれぞれの問いに統一的な立場から接近することにある。

- (A) 省略情報の復元に必要な言語的手がかりは、どのようなものか。
(B) 省略可能な要素は、文法的にどのように特徴づけられるか。
(C) 省略に関する個別言語固有の要因を知る手がかりはどのようなものか。
(C-1) 獲得の引き金になる要因はどのようなものか。
(C-2) その要因は第二言語獲得においても学習者にアクセス可能か。

3. 研究の方法

本研究で取り上げる省略現象は「表出されないにも関わらず意味内容を伝達する」という言語現象としては特異な性質を有しており、言語知識の理解に対して、本質的な貢献を期待できるものである。通常これらの問題意識はそれぞれ、語用論、統語論、意味論、母語獲得、第二言語獲得の諸領域で独立して掘り下げられることが多く、個々の研究者の関心の散逸によって、統合しがたいのが現実問題である。

本研究では、パラメータの具体的な提案にもとづく検証を行い、理論全体の整合性の観点から、談話文法と文文法の精緻化をはかることを目的とするが、このようなアプローチで十分な研究成果をあげるには、各領域における知見が一定程度集積した状況が整っている必要と、かつ効果的な切り口を見つける必要がある。このため、関連諸領域における研究動向を概観し、ある程度の基礎的な知見がそれぞれの領域において集積している状況を踏まえ、この現象に対して複数領域の視点を複合したアプローチを取ることが有意義な成果を上げるものと考えに至り、このために、具体的に以下の作業を行った。

1. 先行研究の検討

2. 文法と談話文法の構成要因の整理
3. 日本語を母語とする英語学習者における第二言語習得研究

4. 研究成果

省略を生み出す言語の仕組みについて、文法メカニズム、談話の構文形式、第二言語獲得のそれぞれの観点から検討を行った。統語論、語用論、言語獲得研究の各分野における省略現象に関する先行研究を収集して精査し、これまでの知見の整理を進めた。そのうえで、説明の道具立てとなる基礎的な仮説群の整理を行うと同時に、日本語の具体的な省略現象について、その分析の可能性を検討し、理論的課題の整理を行った。

まず、省略現象に説明を与えるための理論的枠組みとして、ミニマリストプログラムにおける理論の最新の研究動向を集中的に検証して、説明のために利用可能な仮説群を詳細に検討し、整理した。特に、強い極小主義のテーゼを遵守する理論を構築するために Chomsky (2020, 2021, 2022) 等によって提示された、併合 (Merge) とコピー形成 (Form Copy) およびシーケンス形成 (Form Sequence) のみを仮定する非常に単純化された理論的モデルの経験的帰結と理論的意義について、その可能性と限界について、コントロール構文、束縛現象、寄生空所構文、等位構造などの具体的分析を通じて詳細に検討した。

また、移動の結果生じる、いわゆる痕跡位置を占める統語要素が発音されないことについて、Chomsky (2021) などによって提案されたコピー形成の手続きをめぐって理論的検討を行った。移動の痕跡と類似の構造をもつと推測されるにもかかわらず発音される再帰代名詞を認可するメカニズムについて、特に、英語における *-self* 形の再帰代名詞とその先行詞との束縛関係を、この理論的操作に基づいてどのように分析することができるか、その課題の洗い出しと検証を行った。日本語には英語よりも多様な再帰代名詞が見られるため、英語との対比においてどのような課題があるか、さらに検討が必要である。再帰代名詞をめぐっては、一致が関与していることも考えられるが、一般的に日本語と英語の対照研究では一般的に一致の有無において異なることが知られているが、このメカニズムを推し進めると、結果として、ある種の一致と共通するメカニズムを日本語においても仮定することになり、この表面的な日英語の相違とのすり合わせが必要である。

このことはまた、英語と日本語に見られる省略上の対比として、主語や目的語の名詞句の省略可能性の相違との関連においても考える必要がある。ある種の名詞句は、英語では省略されないのに対して、日本語では省略される。このことについて、英語では、主語や目的語の名詞句と、それが項として関連する機能範疇との間に一致の関係が成立することが、項の省略をさまたげる要因となっていることが指摘されており、日本語でこれらの省略が認められるということは、このような一致がないことを示唆している。この分析上の見通しをめぐっては、1980年代以降、主語と機能範疇との間に一致がないことは筋の通った議論が多く提示されているものの、目的語と機能範疇との間に一致がないことについてはまだ十分に議論されつくしておらず、日本語において項と機能範疇との一致が完全に欠如しているか、という論点と合わせて、また、一致のメカニズムのどの部分にどのようなパラメータを組み込むことによって、言語間の相違と母語獲得が説明されるのかについても、さらなる検討が必要である。

談話の観点からは、アスペクトの点から感情表出のメカニズムを明らかにするため、「タ形」や *Hot News Perfect* などの日英語の構文を分析した。日英語において話し手の感情を表出する表現形式（「た」形式と *Hot News Perfect*）に着目し、データの収集、またそのメカニズムの解明を進めた。これらの表現形式には、話し手の感情表出に対応する明示的な言語表現が存在しないという点において、「ある言語表現が音声的に表出されないにも関わらず、その意味内容を伝達できる」省略現象の一つと言える。

さらに、日英語の感情表出機能をもつ構文形式に着目し、その機能がどのような意味性質を基盤として生み出されるのかについて検討した。今年度研究対象とした構文形式は、英語の *GET* 受動文、*Hot News Perfect*、日本語の「てしまう」形式である。これらの構文形式に共通する「完了」「完結」といったアスペクト的特徴こそが、話し手の感情表出を生み出す基盤となっていることを明らかにした。

第二言語獲得の観点からは、明示的文法指導の方法論を検証し、特定の文パターンの教示において、具体例を用いて特定の文が非文法的であることを指摘する、いわゆる直接否定証拠を用いることの有効性を確立するため、省略とは異なる他の構文（自動詞構文）の教示においてその可能性を検討する調査を行った。その結果、非文法的な具体例を用いた文法指導を与えた実験群においては、指導後のテストにおいて誤りが減ったのに対して、文法的な具体例のみを用いて文法指導を与えた対照群と文法指導を与えずテストのみを行った統制群においては、誤りはむしろ増えたことが観察され、直接否定証拠の有用性が確認された。現在、この方法論を用いて省略現

象の指導効果を検証する実験を計画している。

また、日本語を母語とする英語学習者に見られる誤りに対する明示的文法指導の有効性、および指導の際に直接否定証拠を用いることの有効性を検証した。省略現象の獲得を検証する前段階として、英語における自動詞の下位分類（非対格動詞）について調査し、効果が見られた動詞と見られない動詞があることがわかった。この理由についてはさらなる調査が必要である。

さらに、日本語を母語とする英語学習者に見られる他動詞の目的語欠如の誤りについて、その要因を調査した。英語学習者は*I enjoyed very much.のように他動詞の目的語が欠如した文を文法的であると誤って判断する傾向があることが分かっているが、今年度の調査を通して、そのような誤りへの気づきの程度が動詞によって異なることを明らかにした。本調査結果を基に、なぜ動詞により目的語欠如の誤りへの気づきの程度が異なるのかを動詞のアスペクト等を手がかりとして更に調査を行う予定である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 大瀧綾乃	4. 巻 -
2. 論文標題 他動詞と自動詞の区別と明示的指導：arriveなどの非対格動詞の場合	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 大瀧ほか（編）『第二言語習得研究の科学 第2巻 言語の指導』くろしお出版	6. 最初と最後の頁 41-62
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 小町 将之	4. 巻 73
2. 論文標題 コピー形成にもとづく束縛関係の分析試論	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 人文論集 = Studies in humanities	6. 最初と最後の頁 25-37
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.14945/00029091	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 小町将之, 北原久嗣, 葛西宏信, 瀧田健介, 大滝宏一, 内堀朝子	4. 巻 39
2. 論文標題 Workshop Report: Strong Minimalist Thesisを満たすUGの説明理論：その輪郭と概念的根拠	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 JELS	6. 最初と最後の頁 136-137
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 田村敏広	4. 巻 -
2. 論文標題 夕形による感情表出と視点	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 菅井・八木橋（編）『認知言語学の未来に向けて』（開拓社）	6. 最初と最後の頁 63-74
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 田村敏広	4. 巻 28
2. 論文標題 “Hot-News” Perfectに関する一考察	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Ars Linguistica	6. 最初と最後の頁 33-50
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大瀧綾乃	4. 巻 51
2. 論文標題 否定証拠を主とした明示的文法指導の効果 英語の自動詞に対する理解に焦点を当てて	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 中部地区英語教育学会紀要	6. 最初と最後の頁 1958-202
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

[学会発表] 計4件(うち招待講演 0件/うち国際学会 1件)

1. 発表者名 小町将之
2. 発表標題 探索の帰結からみた位相
3. 学会等名 日本英文学会中部支部 第74回大会 シンポジウム「位相を再び考える」
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Jun Omune and Masayuki Komachi
2. 発表標題 Agree in strictly Markovian derivations
3. 学会等名 First International Conference on Biolinguistics of the Universite du Quebec a Trois-Rivieres [BioLing1] (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 小町将之, 北原久嗣, 葛西宏信, 瀧田健介, 大滝宏一, 内堀朝子
2. 発表標題 Strong Minimalist Thesisを満たすUGの説明理論：その輪郭と概念的根拠
3. 学会等名 日本英語学会第39回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 大瀧綾乃
2. 発表標題 否定証拠中心の明示的文法指導の効果：英語の自動詞に焦点を当てて > (課題別研究プロジェクト「言語・認知・学習理論を基盤とした英語指導の新しい展開」)
3. 学会等名 中部地区英語教育学会 第50回愛知記念大会
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	大瀧 綾乃 (Otaki Ayano) (60840676)	静岡大学・教育学部・講師 (13801)	
研究分担者	田村 敏広 (Tamura Toshihiro) (90547001)	静岡県立大学・国際関係学研究所・准教授 (23803)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------